

林檎とパイプ

三浦哲郎

三浦晶子



父と娘の往復書簡

林檎とパイプ

三浦哲郎

三浦晶子



林檎とパイプ 奥附

昭和五十五年二月十日 第一刷

定価 八八〇円

著者 三浦哲郎・晶子

発行者 杉村友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二二一

印刷 凸版印刷 製本 矢嶋製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

はじめに〈哲郎〉

私のところには、女の子ばかり三人いて、長女の晶子はこの三月に都立高校を卒業し、次女の志のおは四月から区立中学校の三年生に、三女の泉は区立小学校の五年生にそれぞれ進級した。

三人とも、至って健康、食欲もすこぶる旺盛である。

私は、まだ学生のころに結婚したが、もし将来子供が持てるとしたら、まず三人、それもあまり間隔を置かずに欲しいものだと思っていた。私自身、六人きょうだいの末弟でありながら、兄や姉たちとはずいぶん齡が離れていて、きょうだい付き合いの味というものを知らずに育った上に、四人の兄や姉たちとは子供のころに死別したり生別したりで、あとに十歳年上の姉と二人取り残されて淋しい思いをしているからである。

そこで、せめて三人。一姫二太郎で、三人目は男女どちらでもよろしい。その三人を、三年か四年の間隔で持てたら理想的だと思っていたのだが、世の中のこととはなかなかこちらの思う通りにはいかない。間隔の方は、偶然のことながらまずまずの出来だったが、生まれてきたのは、そろって女の子ばかりであった。

長女は、ひどい貧乏暮らしのきなかにできて、とうとう都落ちをして郷里で息をひそめている間

に生まれたが、このときは、女で結構、無事に生むことができただけでも幸運だったとしか思わなかった。私の姉たちが、若いうちに暗い衝動に駆られて自滅したので、明るく明るくと念じて、日を三つ重ねて晶子と名づけた。

次女が生まれたときは、てっきり今度は男だと思っていたから（別段これといった根拠もなかったのだが）、正直いってがっかりした。しかも、この子は正月の元日の朝、まだ雑煮も食わずにいるうちに突然母親の腹のなかで暴れ出し、その日の夜半、正確に言えば一月二日の午前二時に生まれてきたのである。ずいぶん人騒がせな子である。

二日の午後、荻窪の先生のお宅へあたふたと御年始に駆けつけると、そこに居合わせた伊馬春部さんが、まずは新年早々めでたいことだといって、私の『忍ぶ川』という作品から取って志のぶと命名してくださった。

三女のとときは、母体が衰えていたせいとか、難産であった。私は、ちょうどそのころ、臨月なのに山の畑へ働きに出かけて、泉のほとりで自分で赤ん坊を生み落とし、その生んだばかりの赤ん坊を前掛けにくるんで山を降りてくる気丈な農婦のことを書いた『泉』という短篇小説を発表したばかりで、その農婦にあやかる意味で生まれてきた子供には男でも女でも泉と名づけようと思っていた。結局、女の泉ということになったが、もう、あまりがっかりもしなかった。なんとなく、そうか、そういうことかという気がただけである。これで、子供は三人、女ばかりということになった。

私の郷里では、女の子供を三人持つと竈かまどを返すといわれている。返すというのは、ひっくり返す

で、竈をひっくり返すということは即ち破産することだ。女の子を育てるにはなにかと費用がかかる上に、ようやく一人前に育て上げたかと思うと、今度は嫁入り支度をしてやらねばならない。こんな娘を三人も持った日には、ちょっとした身上など、ひとたまりもないというわけである。

だから、私はいわば将来の破産を予告されているようなもので、三女を嫁がせた途端に夜逃げをすることになるかもしれないのだが、これも天の配剤とあれば致し方ないだろう。それまでは、父親としてせいぜい子供たちにできるだけのことをしてやるよう心掛けるほかはない。

できるだけのことといっても、私は、親が子供の将来のためにしてやれることはといえば、丈夫な軀に育ててやることと、やがて自分で自分の人生を選び取れるような素地を作ってやることぐらいのものだと思っている。その素地も、素直で柔軟な心と人並みの智慧さえあれば、それで十分だと思っている。

子供の健康に気を配って丈夫な軀に育てること。これはなんといっても、親の子供に対する最大の贈りものである。もし子供に他のものを要求するあまり健康を二の次ぎに考える親がいるとしたら、それは親として最も恥ずべき怠慢だといっている。

また、子供の人生を親がきめるなど滅相もないことで、そんなことまでする権利も義務も親にはない。子供の人生は子供自身が自力で選ぶべきであり、親はただ、それができるような素地を作ってやって手助けをするだけである。あとは、相談があれば乗ってやり、気がついたことがあったら助言してやればいい。権利や義務は別にしても、子供の人生くらい子供自身に選ばせてやるのが、親の思い遣りというものだろう。

私たちは、いま、東京の練馬区の石神井川のほとりの家で暮らしている。家族は私たち夫婦に子供たち、ほかに飼いだのブルドッグ（この犬にはケルー・オブ・ゴールド・コトブルという長ったらしい本名があるが、私たちは綽名でボスと呼んでいる）が一匹いる。せまい庭には、季節になるとぎっしり花をつける白木蓮と、銀木犀が二本、楕円形のちいさな池には金魚が九匹と亀が一匹棲んでいる。

この三月までは、朝、子供たちがそれぞれ学校へ出かけてしまうと、夕方まで、私たち夫婦とブルドッグだけの静かな時間がつづいたものであった。私は大概、二階の仕事部屋に閉じ籠もっていて、時々ぼんやりパイプをふかすために階下の茶の間へ降りてゆく。妻は掃除をしたり、炊事をしたり、洗濯をしたり、雑誌を読んだり、新聞の切り抜きをスクラップブックに貼ったり、お手本をみながら習字をしたりしている。ブルドッグは大抵昼寝をしていて、そのいびきが家のなかにまできこえてくることもある。

ところが、四月になってから、一日中家にいる仲間が一人増えた。その新入りは長女で、大学の受験に失敗して浪人になったからである。

長女は、私の母校の大学を受験したのだが、失敗したという報告を聞いたとき、私は、そうかと軽く頷いて、いちど落ちたぐらいでくよくよするなといった。けれども、正直いうと、できれば長女の胸のなかをそっと覗いてみたかった。というのは、もう四十年も前のことになるが、私の姉の一人が女子高等師範学校の受験に失敗したあと、不意に自殺してしまったからである。

長女は明るくて気さくな子だから、まさかとは思うが、私としては、この一年、長女の心の眩きにじっと耳を澄ましていたいという気持を捨て切れない。

それで、今度、週にいちどずつ長女と短い手紙のやりとりをすることにした。おなじ家に住んでいて、文通するというのはおかしいことかもしれないが、私は長女の浪人生活を見守りながら、茶の間では話せない愚痴や溜息や独り言の聞き役になってやろうというわけである。題して、「林檎とパイプ」——いうまでもなく林檎は頬つべたの赤い長女のこと、パイプはヘビースモーカーの私のことだ。

へ林檎とパイプⅡ父と娘の往復書簡Ⅱ 目次

はじめに

第一部

〈昭和53年5月11日—同年10月5日〉

- 初めての外泊 13 泣きどころ 18 浪人の小遣い 23 手紙について 28 花を見る 33
 他人のこと 38 肥満の弁 43 クラス会 48 祖母の贈物 53 妹の夢 58 ある脱出 63
 山麓通信 68 浪人と海 78 夏季講習会 83 浪人失語症 88 お盆のころ 93 夏を送る 98
 髪を切る秋 103 ラグビーよ、足音静かに 108 受験の御守 113 木犀の匂うころ 118
 またいつの日か 123

11 1

第二部

〈昭和54年6月7日—同年10月11日〉

- 新しい出発 131 図書館にて 136 一人暮らし 142 ぬくもりの記憶 148 真昼の白い空 154
 浪人後遺症 160 アルバイト考 166 朝の匂い 172 真夏の旅 178 きれいになりたい 184
 海とオムレツ 190 亡きひとを 196 留守番料理 202 夏のうしろ姿 208 郷里での見聞 214
 京土産 220 二年ぶりの秋 226 林檎の季節 232

129

装
幀

栢
澤
齋

林檎^{りんご}とパイプ
へ父と娘の往復書簡

第一部 昭和五十五年五月十一日—同年五月五日

初めての外泊



お 父さん、先日は外泊を許して下さい、ありがとうございます。

私がマネージャーをしていた高校の女子バレー部の友達が、筑波大学に入学して、もう当分の間会えないから、他のバレー部の卒業生六、七人と一緒に、次の土曜日、家に泊まりに来ないかという誘いを受けたのは、本当は木曜日で、お父さんに相談する二日前のことだったんです。

私としては、行きたい気持九分と、浪人としての恥ずかしき一分があつて、考えちゃったし、また行かせてもらえるかどうかということでは、友達の家泊まりに行くことを一度も許されたことのないわが家では、希望ゼロでしたから、友達への出欠の返事もすれすれの土曜日まで待ってもらったの。

お父さんは、きっと、「浪人なのだから少し落ち着いて勉強しなさい。それに、その晩泊まるというのがいけない。」そう言うと思っていました。お父さんの怒った顔を見なくなかったのが、二日間言い出せなかった理由です。



ですから、お父さんがすんなり許して下さった時は、自分でもちょっとびっくりしました。

バジャマ、歯ブラシ、タオルを大きめのバスケットに入れて出かけたのですが、後日、ある友達から、「夜八時ごろ、妹が歯医者への帰りに、そわそわと駅に向かって歩いてくるあなたを見たっていうけど、どうしたの？」と心配の電話がかかってきたくらいですから、私、よっぽどニタニタしながら歩いてたんでしょね。

初めて友達の家泊まったんですが、そのお家の人がいなかったもので、ちょうど修学旅行の晚みたいな感じでした。用意してくれたお菓子やお料理の他に、各自の好きなものを飲んで、翌朝六時までいろいろ話をしました。私は二年生の半ばに急にマネージャーとしてこのクラブに入ったので、あと一步、気持の上では踏み込めない何かがあったんですけど、この晩は完全に胸を割って話ができたように思います。

各自の将来の方向についても聞きましたが、割に教育系に進む人が多く、又その人たちはそろって進学指導のような教育はしたくないと言っていました。中でも、スポーツにも勉強にもいつも一生懸命で、その能力と集中力とはみんな敬服していた友達が、

「私が今一番悔しいのは自分に創造力がないってことなの。小学校の時から先生に言われたようにやって来て、そしてそれですべてすんで来たけど、今になってすごく大切なものを落としてきた感じがする。」